

ガス管工事会社専従の若い同僚が、「警備員のことなんて書くことがあるんですか。第一、面白い話なんてないでしょう」と疑問を呈していたが、私はこう答えたものだ。

「それがたくさんあるんだ。なぜなら交通誘導員は一般的に毎日依頼先も現場も同僚警備員も違うからね。近隣住民やドライバーにもさまざまな人がいる。年齢も違えば**多様な価値観を持つ人間の集まる**ところには**ドラマが生まれる**。私はそれを体験し聞きしてきたから、面白くないはずがない」と。

日記形式の本文全項目はすべて私の体験が基になっている。

立哨

立哨なんてただ立っていればいいのだから簡単だろうと考えるのは間違いである。通行止の看板を立てれば、迂回路を正確にドライバーに説明しなければならない。通行止の域内に入ろうとするクルマはすべて停めて、住民のクルマか営業車か単なる通り抜けなのかを見極めて適切に対応しなければならない。住民のクルマの出入りが多い場所では同じクルマを何度も停めて誰何（すいか）すれば不興を買うこともあるので、ナンバーを控えておくことも大事である。

~~~~~

誰何

〔名〕(スル)相手が何者かわからないときに、呼びとめて問いただすこと。

~~~~~

目の前でクルマが混んでいるからといって勝手に交通整理をして接触事故でも起こせば当然私にも責任は及んで来る。**ドライバーは自分の責任を棚に上げて「警備員さんが誘導したから」と責任逃れをすることは目に見えている。**

しかし、にっちもさっちも行かなくなった状況を見て、つい私は誘導灯を手に交通誘導を始めた。角に梨販売所の駐車場があるので、私が動けばなんとか渋滞は解消するはずだった。すると後続車のドライバーから思いもよらぬ罵声が飛んできた。

「てめえ、もっと先のほうに立って誘導してればこんなに詰まらねえだろうが。バカヤロー」

善意でやったことが認められないことほど悔しいことはない。

あまり悔しくてあるベテラン警備員にアドバイスを仰ぐと、そういうときは看板に隠れているといいですよと言われた。さっそく、翌日は知らんぷりをしていようと決め込んだ。すると案の定、昼ごろになって昨日と同じような混雑が出来(しゅたい)した。

看板の陰に立っていると「こらー、警備員何している！」とドライバーの怒声が飛んできた。他のドライバーも同調して大声をあげて私を非難している。仕方なく「私はこの道路を交通整理する権限は与えられていないんです。交通整理したくてもできません！」とやり返すと、非難の声は止まった。

久慈の提案に松井は心底ほっとした表情を浮かべていた。**朝9時から夕方6時まで食事も取れずトイレにも行けない**となると、私は考えるだけで憂鬱になった。

季節は6月。青空とはいえ空気はじっとりして、のども渴きそうだった。水を飲めばトイレに行きたくなる。我慢しなければならない。

「すみません。まっすぐ通り抜けることはできません。どちらへ行かれます？」すると赤い車の窓を開けて、ちょっと派手目の化粧と服装の中年女性が「すぐそこよ。ほら見えるでしょ。そこのマンション」と指をさす。マンションは現場周辺にいくつもある。こういう曖昧な返事には注意を要する。もっと具体的に聞かねばならない。

「というとなあの5階建ての白いマンションですか。あそこなら工事現場のすぐ近くですが右折して通れますよ」

私は一番近くに見えるマンションを指さして話をした。すると女は「そうよ、そこ、そこ」と答える。私もこれなら間違いあるまいと思った。「どうぞお通りください」と声をかけると女はクルマを発進させた。

ところがそのクルマは白いマンションへ続く道には右折せず、工事現場の手前で停車している。「はあ？」である。

現場ではしばらく女とのやりとりがあって、工事を中断させて作業員が慌ただしく動いている。掘り返した穴の上に鉄板を渡し、女の赤いクルマはその上を通っていった。しばらくすると50過ぎの監督が怖い顔をして私に近づいてきて「いったいあんたは何のためにそこに立っているんだよ？」と大声で詰問してきた。

こんなとき弁解してもムダだが、素直に謝る気にもなれない。「いや、手前の白いマンションですかと指を差して確認したら、そうだと言ったので通しました」と答えた。すると責任者は「あの女は『ガードマンがまっすぐ行けますと言ったから来た』と言ってたぞ。もっとしっかり相手の話を聞かなければダメじゃないか。しょうがねえなあ」と怒りを一ンダウンさせて戻っていった。

しかし不愉快この上ない。これ以上どう聞けというのか。ドライバーの中には迂回したりバックするのを嫌い、工事現場の前まで行けばなんとかかなるだろうと考える人がいるのだ。

私が現在勤務している会社は**70歳以上の高齢者が8割**を占めている。驚くようなパーセンテージである。これは私の面接を担当したのが社長で、私が72歳と知って、社長が教えてくれたのである。小さな会社で本社支社合わせて3つしかない。



「そうかねえ。ボクは昔から年上の女が好きなんだよ」

「そんなことを言って、加地矢さんは今84歳でしょ。いつの話をしているんです？」

すると加地矢は「今はもう男として役立たずだけど、3、4年前まで現役だったからその時分までの話」と言う。「それなら相手はみんな梅干し婆さんじゃないですか」と私がまぜっかえすと、加地矢はこう否定した。

「あのね、そう決めつけるもんじゃないの。ボクが彼女たちと知り合うのはたいていが家の近くのスナック。そういうところに来る婆さんは金に余裕があっておしゃれなの。だから年齢より見た目10も若いし、気も若い。男に対する好奇心も遠慮がない分、若い女と変わらないよ」

「へえ、しかし加地矢さんはお酒を飲めないんでしょう。それでスナックへ行くんですか」

「酒は舐める程度だけど、スナックの雰囲気が好きなんだよ。それにボクは話好きだし」
「それはわかりましたけど、なぜ年上のお年寄りが好きなんです？」
すると加地矢は照れもせずこう言った。
「セックスがいいんだよ。あのすごいよがり声は怖いものなくなった女の最後の喜びの声なんだね」
私には思いも及ばぬ世界なので驚くしかない。

ある日、
私は好奇心が勝って加地矢に聞いてみた。
「今の電話の人は加地失さんの義母(おかあさん)ですか」
すると加地矢は「いやあ、元行きつけのスナックのママなんだよ。もう 92 歳近くで体を悪くして病院に入っているんだけどすぐ家に帰りがあって、そのたびにボクのところへ電話をかけてくるから困ってしまうんだ。いくら論してもわかってくれない」と言うではないか。
なんでも彼女の面倒を見る人がいないのと住まいが近くなので、病院への送迎や入院手続きなどを含め、加地矢がなにくれとなく世話をしているのである。
「へえ」と驚く私に加地矢は「病院では近くの特別養護老人ホームに優先的に入所枠があるので勧めているけど、自宅がいいと本人が首を縦に振らないんだ。本人は全財産をボクに譲るからと言っているけど」と嘆く。
それなら加地失も面倒の見甲斐もあるのではないかと思い「財産家なんですね」と聞くと加地矢は「ハハ、預金残高 90 万円」と笑う。
「エーッ、それならもうすぐ入院費なんかでおしまいですね」
「そうなれば、アパート暮らしだから生活保護さ」
私は改めて加地失の人間性を見直した。加地矢はそんな行為をまったく善意で行なっているようだ。
・・・
【追記】彼女は本年 2 月に 92 歳で亡くなった。死因はがんで、加地矢は彼女の妹夫婦に代わり、納骨まで面倒を見たとのことである。

~~~~~

差配  
所有主にかわって貸家・貸地などを管理すること。また、その人。差配人。  
指図してとりさばくこと。  
~~~~~

自分が言うのも変だが、この日記には人格者はほとんど登場しない。交通誘導警備という仕事の性格上、仲間と深い人間関係を築くことはまずない。それに現場は日々追うところで、相方も変わる。仕事を終えて連れだって飲みに行くこともない。
みな仕事が終われば「お疲れさま」と挨拶をしてサッサと帰ってしまう。要するに仲間が人格者かどうか知るまでには至らない。
逆に意地悪な人、こうるさい人、威張る人などはたった 1 回の現場でも強く印象に残る。よってこの日記にはそんな人物がしばしば登場することになる。
私も警備の仕事をして世間にはこんなに価値観や性格の違う人がいるのかと驚かされた。時に現場の監督には極端な人がいてしばしば驚かされる。

配達に来る人は女性が主で若い人で 20 歳過ぎ、他に 50 歳、60 歳くらいか。みんないつもマスクをしている。ある日、入口に案内しながら 50 歳くらいの女性に「お姉さん、随分美人ですね」と冗談交じりのお愛想を言ったところ、彼女はノ

リがよく「あらあ、マスクしててもわかるのかしら、美人は？」と返しできた。

そこで私は「わかりますとも。ただし決してマスクは外さないでください」とやったところ、彼女はマスクから口がはみ出すのではないかと思うほどの大笑いをしていた。こんなささいなことが気晴らしになる。

警備員が警備の技量を磨くには多様な現場を経験することと場数を踏むことしかない。屋内でいくら研修を受けてもそう簡単にうまくなるものではない。上手な人を間近に見れば勉強になるし、若い人と話せば気分も若返る。

トラバー

正式にはコーンバーという。黄色と黒の交互模様が一般的。バーの両端にはポリエチレン製の吊り輪がついている。工事現場や駐車場でカラーコーンの頭に吊り輪をセットして使う。ネコパーと言う人もいる。

杉浦はユーザー宅の仕事を終えて、ワゴン車のそばで動こうとしない私を見て、「早くバック誘導をしろ！」と運転席から顔を見せて怒鳴る。私は覚悟を決めて助手席のドアを開け、「あんたのように、人をボケ老人呼ばわりしたり、公道上で危険な引っ掛けをするような人間とはこれ以降一緒に仕事はできない。だから帰らせてもらおう」と強い口調で言った。

すると杉浦は驚く様子もなく「ボケ老人とは言っていない。帰るのならどうぞどうぞ」とそっぽを向いてしゃべる。私はそのまま帰ってしまった。携帯電話を忘れたので支社にはすぐに連絡しなかった。

杉浦はF社の担当者にすぐ電話を入れたのだろう。無能な警備員に教育的指導をしたのだが腹を立てて帰ってしまったとか、いくらでも言いようはある。

帰宅するとすぐ支社長から電話があり、事の顛末を開かれた。詳しい内容は文章にしてファックスで送ってくれと言う。F社の担当者に**顛末書**として送付するとのことだ。始末書だったら拒否したが、私は事実だけを書いてすぐに支社長宛にファックスした。

その後、この件に関してはF社及び所属の会社から譴責されることばなかった。杉浦が問題社員であることはそれ以前からF社も支社長も把握していたのである。彼はF社に出入りする警備会社3社のうち2社から警備拒否されていた。個人が名指しで警備拒否されるなどこれまで私は聞いたこともなかった

警備業は忍耐業

気候の寒暖やドライバールの横暴ぶりだけが警備員のストレスになるのでは

ない。気の合わぬ同僚と何日も一緒に仕事をする事になれば、これも大きなストレスになる。そんなとき、私は最後の長岡警営女（ながおかごぜ）小林ハルの言葉を念じたものだ。「いい人と歩けば祭 悪い人と歩けば修行」。

交通誘導の仕事は、よくやって当たり前、ミスをすれば頭ごなしに監督や親方から叱られる。時には同僚から罵声を浴びせられる。人間はどんな人であれ承認欲求はある。承認欲求とはものの本では「自分が価値ある存在であると認めたい欲求」とのこと。
・・・

仕事ができても当たり前の人には承認欲求はそれほど強いものはないかもしれない。むしろボーダーライン上にいる人のほうが強いかもしれない。それが満たされない警備員は屈折して作業員や同僚の陰口を言ったりする。「あんなバカと仕事ができるか」とか「上から目線で偉そうに」と根拠のない攻撃に出てしまう。

午前1時か2時に終わっても少しも嬉しくなかった。次の日勤まで時間のつぶし方がない。マクドナルドで何か飲み物でも買ってウトウト眠ればよいが、新宿や池袋のような繁華街でなければそんな時間のつぶし方はできない。
東武東上線や井の頭線沿線などの小さな駅付近では深夜開いている店などほとんどない。駅の近辺に行き、真冬の冷たい風がビュービュー吹きすさぶ中、風よけになる建物の軒下で始発まで電車を待つ惨めさは味わったことのない人間には到底わかるまい。その日の日勤が朝8時もしくは9時だとしたらそれまで時間をつぶさねばならない。

そういう意味でもドライバーは「警備員が通れと言ったから」などという言い訳は通用しないことを知っておいたほうがいいだろう。

これはまた逆の意味もあって**警備員はむやみと一般車両を誘導してはいけない**。駐車場内でも同じである。制服を着ていると交通整理の警察官に近い権限があるような錯覚に陥ることがあるから、気軽にクルマを誘導してしまうことがある。

私と3、4回一緒に警備をした同僚は、他の警備会社から移ってきたばかりだった。年齢も近くよく話をすることがあった。前の会社で彼の同僚だった人は、する必要もないのに**善意で女性ドライバーが運転する高級外車をバック誘導**したところ、接触事故を起こしてしまった。

女性ドライバーは警備員の誘導ミスと言ひ募った。示談交渉になるとその筋と思われる男性が前面に出てきて補償金500万円を要求してきたそう。

「エーッ、いくらなんでもその金額はないでしょう。で、支払ったんですか？」と彼に聞くと支払ったと言う。

こういう場合、警察は民事不介入で動いてくれないらしい。相手がたとえば暴力団組事務所の名が入った名刺を出すとか「山の中へさらってしまうぞ」などと明らかに当事者を畏怖させるような言動をすれば別だが、今どきそんな馬鹿げた振る舞いをする暴力団員はいない。パンチパーマにサングラス、縦縞のスーツだけで、物腰はソフトでも充分相手を威圧できる。

同僚は「あれは女がわざと自分のクルマをぶつけたんじゃないかとオレは睨んでいる」などと物騒なことを言っていた。

さまざまな現場で仕事をしてきて思うのは、人柄のいい親方の下には粗暴な作業員はいないし、乱暴な言動をする親方の下には同じような作業員が多いことだ。

コミュニケーション能力
私が2番目に勤めた警備
会社で夜勤をした際、若い
警備員が話しかけてきて、
こんなことを言っていた。「ボクは**夜勤専門**
なんです。昼間は人や自転車、
それに近隣住民がうっとうしくて
かないません。その点、夜勤は
みないなくなりますから」。夜勤を
選択する人の中には人とのコミュニケーションの
煩わしさを嫌う人もいようだ。

できない警備員

- 1 つは注意散漫な人。
- 2 つ目は無責任な人。
- 3 つ目は何も考えない人。
- 4 つ目は空気を読めない人。

会社は警備を依頼されて引き受けるとき、できる人できない人を分けて金銭的請求をしているわけではない。10 人必要なら 10 人揃えることが会社の力量であり信用なのだ。警備員も適材適所で配置すれば、力量のばらつきはある程度は解消される。そこがこの仕事が高齢者にも向いているところと言えよう。

とかく話題の ZOZO の前澤友作社長は人材活用に関して、給与でことさら能力差をつける必要はないと言う。

というのも何人かでキャンプに遊びに行けば、火を起こすのが得意な人、テント張りが得意な人、料理が得意な人がそれぞれ役割分担して協力し合う。川で魚が何匹か釣れれば平等に分ける。そこで差をつけようとする人間はいない。**集団では能力差は解消できる**。会社も同じである。そんなことから前澤は今後の社員採用ではなく引きも考えていると広言している。

話を戻すと、できない警備員や高齢者は会社や仲間に認められたいと思って仕事をししているわけではない。警備という仕事のピースの一つでいいと思っている。

よく言うではないか。会社で足手まといの社員を排除したからといって生産性が急上昇するわけではなく、またその分できない社員がゾンビのように出てくると。

社会とはそういうものなのだ。持ちつ持たれつで成り立っている。警備業界をつぶさに観察するとまさに社会の縮図というのはそういうことでもある。

今日は警備の仕事を休んで私の会社清算（およそ 37 年ほど前に設立した編集プロダクションの法人格）にまつわる税務署員の自宅捜索等に付き合った。

・・・

なぜこのようなことになったかというと、約 2500 万円の税金の未払いがあったからだ。内訳は法人税と所得税で約 1500 万円、約 1000 万円が延滞金である。その税務署管内でも税金未納額としては上位に入ると税務署男ら聞

かされていた。

そんなこともあり出版の仕事の合間を縫うように断続的に警備員としての仕事が数年続いたのである。なんとか生活はできて、よいときの収入の10分の1、20分の1である。私の人生で一番希望が見えない時期であった。

私にとって**金がないことより希望が見えないことのほうがつらかった**。自業自得と言えそれまでだが、思案に余るとはこの頃の状況である。

そんな私に希望が見えたのは昨年（2018年）3月に会社清算が決定してからである。もう税務署に税金で督促されることもなければ差し押さえを受けることもない。付き合いのある出版社にこの件で迷惑をかけることもない。

完全にライター兼編集者として仕事をするができる。軌道に乗るまでどんなアルバイトをしてもいい。もちろん当分は警備員を続けるが、会社清算前とはまったく気分が違うのである。夢が持てるようになった。

他人は**72歳にもなって何を能天気なことを言っ**てと思うかもしれない。それが常識というものかもしれないが、私はもともと山っ気のある性分なの**かもうひと花咲かすつもり**なのだ。自分に甘い性分はリアリストの妻に見透かされているが、今後どうなるかは努力次第と考えている。

ランマ（ドドドと大きな音を立てながら砂や碎石を固める工具）

~~~~~

ランマーは、装置の自重と衝撃盤の上下運動による衝撃で地面を突き固めるための工具です。タンピングランマーとも呼ばれます。

プレートは、本体を振動させることにより、特に表層の転圧作業に向いている工具です。路面の砂や砂利の転圧や、アスファルトの転圧・表面仕上げなどによく利用されます。ランマーと違って目に見えた上下運動はなく、振動によって地面を締め固めます。

[https://act-kougu.com/column/rammer\\_plate/](https://act-kougu.com/column/rammer_plate/)

~~~~~

あとがき

私は自著もあるしゴーストライターとしてもたくさんの本を手掛けてきたが、自分の体験をもとにドキュメントを書くのは初めてである。この本を書くために取材したことは一つもないが、2年半という警備員の経験は、まだ鮮度を失っていない。

一方で私は出版の世界で40年近く仕事をしてきた。警備員になってからは半年ほど警備の仕事をしては出版の世界に戻るようなことを何度も繰り返して今に至っている。

この原稿を書いている時点では転職4度目の警備会社に籍を置く現役の警備員である。しかし、専業警備員として生計を立てる人とは違う。今風に言えばダブルワーカーということになる。

振り返ればどんな仕事でも大なり小なり「たいへんそう」なことはある。私のような高齢者は警備員以外にやれる仕事は少ない。マンションの管理人もはねられてしまうに違いない。介護職もそろそろ介護される年齢である。そう考えると**交通誘導警備の仕事ができるだけでもありがたい**。